はぐくみ

家庭教育を考えるシリーズ

発行
鯖江市教育委員会
鯖江市社会教育委員会
青少年健全育成鯖江市民会議

協力
丹南青少年愛護センター鯖丹支所

じわっと効いてくる 子育てのヒント

39号

★★★ 22年度合宿通学より ★★★

教育相談室

カウンセラーの窓から

どうしたら伝わる？自分の気持ち

子育て真っ最中のお父さんお母さんの集まりで、子どもに身につけさせたい「社会性」の一つとして、周囲の人とうまくやりとりができるようになるための、コミュニケーション力のことが話題になりました。

一方、先生方からは、学習や部活動をはじめ色々な活動の中で、自分の思いを抑えて集団に合わせ、心の内に不満をため込み、入学当初の元気がだんだんなくなってくる生徒の姿が気になる、との話がありました。

そこで、相手とは考えが違っていても、自分の思いをきちんと伝え、心地良く学校生活を送ってもらいたいとの思いから、カウンセラーが教室に出向き、上手な関わり方を学ぶ授業をすることになりました。

授業では、まず、友だちや家族など周囲の人と接する時の気持ちの伝え方を振り返ってもらいました。

ある生徒は、「違う考えを言って嫌われるのはイヤだから、自分の気持ちを抑えて話を合わせてしまっている。」と振り返りました。言いたい事を抑えて受身的に接することが続くと、ストレスをため込んでしまい、誰かに八つ当たりしてしまうこともありますよ、と話すと、「そういえば時々、妹たちにきつい言い方をしてしまっている。」と気づいた生徒もいました。

次に、掃除に来なかった級友に、どう注意するかという困った場面での言い方を班長になったつもりで考え、関係を損なわない会話の仕方の体験もしてもらいました。

最後に、自分自身の中で気に入っているところはどこかじっくり振り返りました。

始めは「えーっ、べつにないし…」と言っていた子が、自分の左腕だと言い出しました。毎日の野球の練習に耐えてくれているからだそうです。また、両手を選んだ子は、親から「手の形がおばあちゃんに似ているから、きっと手先が器用になるよ。」と言われたことを思い出して、無意識のうちに気に入っていたことに気づきました。

自分にはいいところがちゃんとある、と思える「自尊感情」の育ちは、「相手のことも認めながら、自分の思いも伝える」という、上手な気持ちの伝え方を根っこの部分で後押しします。

家庭の中では幼少時から、よいところを一つでもいいから見つけて、子ども自身に伝えてあげたいですね。

「自分のことを考えるなんてなかったので、いい時間でした。まずは、気持ちはきちんと伝えて、自分を出すことが大事だと思いました。そして、人の気持ちが分かる人になりたいです。」と、一人の生徒が綴りました。

この学習が、子どもたち同士のコミニュケーショ力を育てるための一助になることを願いながら、感想を読み返しています。

T・S

第2回 家族のふれあい写真コンテスト

作品募集中

昨年度の入賞作

テーマ 家族のふれあい

「家族」のつながりを写真におさめることを楽しんでみませんか？

資格 中学3年生以下のお子様を持つ、鯖江市にお住まいのご家族

応募締切 平成23年1月31日（月）

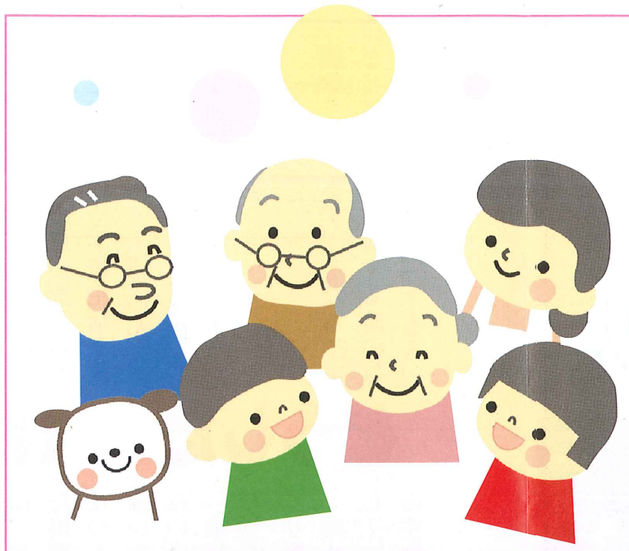
応募先 最寄りの公民館・幼稚園・保育所・児童センター、もしくは教育委員会生涯学習課

問合先 生涯学習課　53-2256（直通）

詳しくは鯖江市のホームページへ！
http://www.city.sabae.fukui.jp/pageview.html?id=9936

R100
この機関紙は古紙配合率100%再生紙を使用し、白色度80%、大豆油インキで印刷されています。

子どもに気づかせる 親はじっくり見守る



私たちは、人に褒められたり、失敗の経験をしたりして
人としてどうあるべきかに気づいていきます。
「気づく」には、いろいろあります。

「早くしなさい」「何しているの」「だめねえ」

思いどおりに動いてくれない子どもを目の前にすると、ついこんな言葉が出てしまいます。

なぜ褒めることができないのでしょうか。

「子どもはもっとできるはず」「わかっているはずだ」という思い込みがあると、厳しい言葉が生まれてしまうようです。子どもは未熟で幼い、これから学んでいく者ということに気づいてください。

「体操服、袋に入れておいたよ」「お茶碗はそのままでいいから宿題して」

ついこんなことを言いませんか。

「合宿通学」に参加した子どもたちは、その後家庭で「お手伝いをするようになった」「靴を並べるようになった」「自分で洗濯物を畳むようになった」という変化をみせています。お友達ができるので、自分もやってみようという思いをもったからかもしれません。

また、お家の方も、いつまでも親がやってやるわけにはいかない、いつかは子どもが自分自身でやらねばならないと気づかれたのかもしれません。「親がしてくれるので、自分は何もしない」という子どもでは、いつまでたっても、自立できませんね。

※「合宿通学」とは、子どもたちが親元を離れて共同生活を行い学校へ通うことにより、家庭における基本的な生活習慣の習得や協調性を育てる教育委員会主催の事業です。

「何度言ったら分かるの」「どうしてできないの」「やっぱり無理なのかしら」

「やればできる」と子どもたちに自信を持たせたいものです。そのためにも、ほんの少しでもできたことを認め、励ましてやりたいものです。やる気を出した子どもたちは、自分の力でぐんと伸びていくことでしょう。

自分のよさに気づかせる

「きちんと挨拶できたね」
「お友達に優しくしていたね」
「続けているのはえらいと思うよ」・・・

具体的によいところを褒める、
これが子どもを
伸ばす言葉です。

自分の役割に気づかせる

「持ち物の準備は自分でするようにしようね」
「自分が使ったお茶碗は台所へ運ぶんだよ」・・・

親が先立ってするより、子どもに任せ、やらせてみましょう。
手を出すことは、
ぐっと我慢しましょう。

自分の可能性に気づかせる

「もう少しでできるようになるよ」
「最後までがんばったね」・・・

褒められて自分のできることに気づくと、次のステップに進む自信と意欲を持つことができると思います。

涓滴　仲良きことは美しきかな

仲のよい人たちの様子を目にすると、ほほえましい気持ちになります。それは、夫婦でも、兄弟であっても、友人でも、同じこと。幸せのお裾分けをいただいたような穏やかな気持ちになります。

明治時代の小説家　武者小路実篤は、「仲良きことは美しきかな」という言葉を残しています。「美しい」のは、仲がよいという様子のことだけでなく、「人と仲良くできるということは人として美しい」という意味も含んでいるように思います。声を荒げ周りの者に当たり散らしている人や自分中心に物を考え、人の悪口を言っている人は、はたから見ると醜く見えます。また、仲たがいしている様子を見ていると、自分のことではないのに不愉快な気分になります。

子どもたちは周囲の人々の様子を見て育ちます。一番身近にいる家族の影響を大きく受けますから、心優しい明るい子に育てるために「家庭円満」が大切であることは、言うまでもありません。しかし、そのことはよくわかっていても、我が身を振り返ると、実践することはなかなか難しいものだということに思い至ります。

そこでまず、家族一人ひとりのよいところを思い浮かべてみましょう。私の妻のよいところ、「きれい好き」「人付き合いが上手」「おおらか」。私の夫のよいところ、「几帳面」「ほがらか」「電気製品の故障を直すのが得意」…案外たくさん思いつきませんか。

「いいところなんか見つからない」とかぶりを振る方も、見方を変えると見つかるものです。例えば毎日、夫が「仕事に行く」ということは、実は忍耐と努力が必要です。また妻が何気なくこなしている料理・洗濯などの家事や留守番でさえも、家族のために働いていることで、実にありがたいことです。こう考えてみると、家族に対して感謝の気持ちがわき、互いに相手のことを大切にする心が生まれてくるものです。

よいところやすばらしいところを見つけられれば、相手を「認める」ことができます。家族間であっても「認める」という気持ちを持つことで、「家庭円満」を実現できるのではないでしょうか。仲のよい家族の中で、子どもたちは、きっと心優しく明るい子に育ちます。

仲良き家族は美しきかな。

「涓滴」とは「しずく」という意味。
しずくも集まれば、やがて大河となることの願いを込めて。